

新体制（言説）のなかの太宰治「清貧譚」——菊を作る／売ること

松 本 和 也

キーワード 蒲松齡、『聊齋志異』、『黄英』、
新体制、ロマンチズム

I

太宰治「清貧譚」（『新潮』昭16・1）は、中国の古典『聊齋志異』に材を採った翻案小説である。それゆえ、これまでの研究史では、典拠との比較やそこから作家の創意を析出しようとするものが大半を占めてきたが、その帰結として「清貧譚」をとりまく歴史的諸条件が死角とされてきたきらいがある。そもそも、「清貧譚」とは支那事変勃発以後の日本で、あえて中国古典が材に採られた問題含みのテクストであるはずなのだ。しかも、「清貧譚」執筆・発表当時は、対中外交をポイントの一つとする新体制（運動）が喧伝された時期と重なっており、本文には「新体制」の一句が刻まれてもいる。そうであれば、R・バルトのいうように、《テクストに関しては、われわれは歴史的知識をシニカルに用いなければならぬ》——《もしそれがわれわれの読書を狭め、小さくするならば、それを放棄すべきである。逆に、もしそれがわれわれの読書を広げ、より快いものにしてくれるならば、受け入れるべきである》。そこで本稿では、「清貧」という主題をめぐる馬山才之助／陶本三郎の対立⁴やストーリーの面白さ・語りの巧みさなど、先行研究におけるテ

クスト（内）読解の蓄積をふまえつつ、テクストを外部の歴史との結節点と見立てて、新体制言説との交渉のなかに「清貧譚」を（再）配置し、その歴史的な相貌を照らしだすことを目指す。

ここで同時代受容を参照しておくならば、『新潮』の特集「創作特輯十三篇」の一作であった「清貧譚」は、無署名「新潮」（『三田文学』昭16・2）で《自分の境地で小説にしてゐる点で、出来のいい、作品》と評された他、H・A「新潮」「日本評論」作品評（『文芸』昭16・2）では《一通り太宰ごのみの清麗なコント》・《まだやはり気障っぽい節が垣間見える》と評されるなど、一部を難じられつつも全体的には好評だったようにみえる。論点別にみれば、「清貧」を守りきれなかった馬山才之助については、岩上順一が「太宰治の一面」（『三田文学』昭16・2）で《純粋性の敗北》という主題を見出し、表現については高木卓が「一月の小説（ハガキ回答）」（『新潮』昭16・2）で《内容はともかくとして実にあざやかな技巧》だと顕揚していた。なかでも、本稿で注目したいのは、「清貧譚」を《面白く読みました》という、石川達三「一月の小説（ハガキ回答）」（『新潮』昭16・2）における次の論評である。

あまりにも現実的な作品ばかり読むせゐるか、かうした空想的な物語りがひどく自分の気持の息苦しさを救ってくれるやうに思はれました。文学はもう少しかういふ仮空の世界にはいつて行

つてもいいやうな気がします。

右の評で石川は「清貧譚」の「ロマンチズム」を評価しているが、そこには、当時の世相を反映した《あまりにも現実的な作品》の蔓延が前提とされている。ここで想定されているのは、報告文学や生産文学など、支那事変に端を発する素材派の作品群であろう。逆に、「清貧譚」を《メルヘンの世界が屈託なく展開されてゐる》と評す「文芸時評」（『早稲田文学』昭16・2）の市川為雄は、《この作品はロマンチズムといふより、この作家にしては、稍オプティミズムに墮してゐる観がある》と判じているが、本稿で後述していくように、「清貧譚」はみかけほど現実から遊離した物語ではないし、現実から空想へという切り返しを体現した「ロマンチズム」一辺倒のテキストというわけでもない。何しろ、「清貧譚」冒頭部には「私の新体制も、ロマンチズムの発掘以外には無いやうだ」とあり、「ロマンチズム」と「新体制」という政治的イシューとが不可分のものとしてテキストに刻印されているのだから。この一文に敏感に反応した読者に安岡章太郎がいる。「清貧譚」との出会いを回想したエッセイで、安岡は次のように述べている。

太宰のいふ《ロマンチズム》がどういふ意味のもの私には良くわからないが、この一行には何よりも作家の若々しい意気ごとと、敢へていへば時代に対するひそかな抵抗の決意のやうなものが読みとれて、私は両親のゐる九州へ向ふ暗い夜汽車の中で昂奮したのである。⁶

具体的な意味内容を理解できないにもかかわらず／それゆえに、

かの《一行》から感じとった《意気ごみ》・《決意》——それこそが、新体制が喧伝されるなか、その言表と切り結びながら発表された「清貧譚」の歴史的な意味作用であり、テキストの潜勢力だろう。そうした受容を、歴史的背景をふまえつつわかりやすく示した栗原彬は、「清貧譚」について、次のように論評している。

時代閉塞の社会心理のなかにあつた民衆は、近衛新体制に「世直し」の幻想を託したのであつた。青年団、壮年団、その他従来政治に関心をもちなかつた人たちが近衛の新体制運動に参与する姿勢を示した。こうした国民の高揚は、自由民権以来であるといわれた。だが、同じ頃、太宰治は、「私の新体制」の試みとして『清貧譚』をもつて、こうした時代の風潮に一矢をむくいていた。⁷

ここで、件の一行を含む「清貧譚」冒頭部を分析しておこう。《現代の物語りテキストにおけるコード化機能は、始まりに所属させられ、題材的・「神話化」的機能は終りに属させられている》⁸という指摘があるように、冒頭部はテキスト総体をコード化していく。

以下に記すのは、①かの聊齋志異の中の一編である。原文は、千八百三十四字、之を②私たちの普通用ゐてゐる四百字詰の原稿用紙に書き写しても、わずかに四枚半くらゐの、極く短い小片に過ぎないのであるが、読んでゐるうちに様々の空想が湧いて出て、優に三十枚前後の好短篇を読了した時と同じくらゐの満酌の感を感じるのである。③私は、この四枚半の小片にまつはる私の様々の空想を、そのまま書いてみたいのである。この

やうな草が果して創作の本道かどうか、それには議論もある事であらうが、聊齋志異の中の物語は、文学の古典といふよりは、故土の口碑に近いものだと思つてゐるので、④その古い物語を骨子として、二十世紀の日本の作家が、不逞の空想を案配し、かねて自己の感懐を託し以て創作也と読者にすすめても、あながち深い罪にはなるまいと考へられる。⑤私の新体制も、ロマンチズムの発掘以外には無いやうだ。

（丸囲み数字・傍線は引用者による）

右の「清貧譚」冒頭部に関して、具体的な《コード化機能》として以下の四点があげられる。第一に、①・②にみられる語りの戦略がある。テクスト内に指示内容をもたないシフターを仕掛けることで、現実世界の読者に自身の知識を動員してテクストを読みとくよう促し、テクストに語り、かけられたという印象を与えつつ、「私」による語りへと引きこんでいくのだ。第二に、③・④に示された、他ならぬこの「創作」の方法論の開示＝手法の露呈がある。この効果とあわせて第三に、「二十世紀の日本の作家」である語り手「私」の存在（感）が、積極的にアピールされる。そのことで「清貧譚」は、この時代を生きる語り手「私」によって示されるテクストだというフレームを伴い現象していくだろう。第四に、安岡章太郎に深い印象を残した⑤において、語り手「私」は同時代読者同様、新体制下を生きており、この「創作」こそが自分なりの新体制への応答であり、かつ、それは「ロマンチズムの発掘」という道行きをとるものであることが予示されている。

このようにみれば、太宰治「清貧譚」を、同時代の視座から読むこと、その際に新体制をめぐる言説に注目していくことの重要

性・必要性は明らかだろう。

II

本節では、「清貧譚」冒頭部の「新体制」という一句を接続部分としてテクスト総体と切り結んでいく、昭和一五年前後に産出された新体制を主題とした言表群——新体制言説を分析していく。

それに先だって、もっぱら物語内容から注目されてきた「清貧」の一語も同時代の視座から捉え直しておきたい。《現在のやうな時局》に自覚的な上司小剣は、《建国の昔から簡素を尚び、清潔を好むのは、日本国民の特有性で、われわれの生活は太古以来それで一貫してゐる》と、『清貧に生きる』（千倉書房、昭15）と題した書物で述べている。その内実はいえ、《欠乏を楽しむ工夫》によって、『困難』を《快楽》へと転じ、長期戦に耐えうる《自粛生活》を永續できる、というものだ。つまり、この時期の「清貧」とは、単に私的な生活スタイルの一例ではなく、国策に即したイデオロギーでもあったとみるべきなのだ。

もちろん、新体制も抽象的な机上の空論ではなく、国民にも直接関わる政治的イシューであった。当時、喧伝された新体制の重苦しさについて、高見順は『昭和文学盛衰史』で次のように回想している。

私たちにとつて「新体制」が重大な問題だつたといふことは、〔略〕私たちの上に重苦しくのしかかつてきたその重さが重大だつたのであり、議論無用といった威嚇的な天下りののしかかり方の故に、何もそれについて論議はできない、そのことのみよしあしについては一言も文句は言へないといふことにおいて

重大だったのである¹¹⁾。

確かに、新体制（運動）は、短期間のうちに大政翼賛会へときつづくのだが、当初はその内実が曖昧なまま、それゆえ、実に多くの言表が総合雑誌を主舞台として飛び交いもした¹²⁾。

新体制を主題とした言表群——新体制言説を通覧してまず目立つのは、新体制がかけ声として瞬く間に広まったこと、にもかかわらず、内実が不分明だという言明である。狩野一平「新聞月評 新体制と新聞廃合の嵐」（『改造 時局版10』昭15・9）が示したように『新体制の嵐は今や新聞街を隅から隅へと吹き荒れようとして』おり、『新政治体制といふ言葉は現代のスローガン』（無署名「巻頭言」政党と新体制）、『中央公論』昭15・9）と化するなか、『新体制が切迫し、一切の古きものが仆れてゆく』（無署名「社説 新体制を迎ふ」、『日本評論』昭15・9）のだけという。もちろん、妙法寺三郎が「新政治体制の生成（政局展望）」（『改造』昭15・9）で『新体制の理念は国民からみれば、ここ数年、失はれ地に墮ちた政治の威信と力を取り戻すこと』、『国家からみれば国家公益優先主義を津々浦々に浸みとほらすこと』だと論じ、あるいは新明正道が「新体制の政治学」（『日本評論』昭15・9）で『新体制の目指すところは、利益的分裂、国家と経済との分離をもたらし旧体制を打開して、国民的協同を端的に生かす強力な全体的な体制を樹立しようとするにある』という理解を示したように、いわば公式見解に近い言表も産出されてはいた。にもかかわらず、各派討論「新体制たたかひとらむ」（『改造 時局版10』昭15・9）で平井羊三が指摘する通り、『今のところ、新体制といふ言葉は、一般国民の間に受け容れられて、何処へ行つても新体制なんだが、しかし、新体制とは何か、

といふことになつて来るとハッキリしてゐない』。ただし、北川一夫が「新体制・新内閣と財界」（『改造 時局版9』昭15・8）でいうように、『口を開けば新体制』という『例の日本人の新しいもの好きの癖』が看取されるにもかかわらず、『こんどはさう簡単には片づけられぬものがある』。『新政治体制が出来ることだけはたしかであらうが、どういふものが出来るか、いつ出来るかといふことは、我々一般国民には一向わからない』という「新体制運動と国民心理」（『改造』昭15・8）の船山信一は、それでも『それをこれから明確にして行くのが新政治体制そのものなり、その組織準備会なりの仕事であるといふところにむづかしさがある』という。そればかりか、『近衛公の任務』（『日本評論』昭15・8）の加田哲二によれば、『近衛公が樞府議長の要職を辞して、新政治体制への呼びかけをしてゐるといふこと自体が、国民の共感を買つてゐる』ともいう。事実、佐藤信衛「新体制の倫理学——理想を畏れる気風——」（『日本評論』昭15・9）には、『新体制の標札が立つたばかりで何も形のできたものがないから、誰もが好奇心をうごかし、また期待もする』という言表がみられる。

内実が曖昧で抽象的であるがゆえに、不安と期待を誘つた新体制（運動）であるが、後の歴史を参照するまでもなく、それが牧歌的なものにとどまらないことも当時から議論されてはいた。杉森孝次郎「新体制運動と学生」（『日本評論』昭15・9）における『新体制運動がドイツの最近の戦績に刺戟されて発生したといふ一面の事実をば何人もこれを認めるであらう』という指摘や、尾佐竹猛「新体制への要望」（『日本評論』昭15・8）の『新政治体制といふことも挙国一致の別名ならんが若しくもファツシヨ的気分に基づくものならば真平御免なり』といった言明がその一例である。新体制（運

動）「フアシズム」という見方は乱暴な短絡にちがいないが、新体制が対支戦線の推移をにらんだ、東亜新秩序（昭13）の延長線上にある方針であることは疑いようがない。杉森孝次郎「近衛公に望む」（『日本評論』昭15・8）によれば《近衛公に我々の今、政治的に望むべきものは、即ち新東亜建設集中主義》であり、細川嘉六「青年の興起と新政治体制運動」（『改造 時局版9』昭15・8）が示す《日支の關係》こそが《日本の運命を決定する》という認識は、新体制（運動）への現実的、な期待となっていく。長島又男は「近衛新体制」の全貌（『改造』昭15・8）で、東亜新秩序というキーワードを用いつつ次のように新体制を受けとめている。

東亜新秩序の建設を指導すべき我が国にとつて、急速に整備されなければならぬ政治、社会、経済の各面に互る『国家再建』の大方針、我が日本が当面最も必要とするものを、端的に、仮令極めて概念的ではあらうとも、とも角その根本的な方式をアツピールした——と云ふところに、近衛公の傑出した政治的識見があつたのだ。

数ヶ月後にもなお、《人々はまた支那事変と新体制との関連について、深く慮かつてゐる》という「新体制の根本動力」（『文芸春秋』昭15・11）の暉峻義等が念頭に置いているのは、やはり《新しい東亜の秩序》（東亜新秩序）なのである。このことと別ではないが、新体制（運動）は国内政治の再編でもある。

《新体制といふ言葉が頻りに用ゐられるが、その要点が何処にあるのか、十人十色でその内容が判然せぬ憾がある》という現状認識を示す蛸山政道は、「外交刷新と国内新体制」（『文芸春秋』昭

15・9）で次のように述べている。

新体制問題の核心は、統治組織に於ける国民的要素の入れ替へ、その再編成にあるのであつて、いはゆる国民翼賛体制の実を如何にして今日の経済、産業文化の状況の下に実現するかにあるのである。

《国内新体制の要諦は一億一心にある》という「新体制下の経済機構」（『日本評論』昭15・9）の本位田祥男もまた、《天皇の御稜威の下に国民が一つの心となつて生活する点》・《上から下迄、打てば直ちに響く体制を整へる点》に、新体制（運動）の目標を置く。

こうして、国内／外の政治的イシューに対し、反帝国主義という意味でのポジティブな打開が託された新体制（運動）ではあつたが、現実／言説において、ことはそうは運ばなかつた。支那事変勃発以後の国内／外の動向を、天皇制の位置づけを軸に検討した米谷匡史は、東亜新秩序までは回避されてきた天皇制が、新体制（運動）において転回をみせたとして、《革新派による新体制運動と日本主義者・現状維持派との曖昧な妥協の産物として、大政翼賛会が成立》したという帰結から、《新体制運動の結果、天皇制・国体を中核とする国民動員がむしろ強化された》と論じている。

今一度の確認になるが、そうした新体制（運動）でありながら、当時、その内実が不分明であるがゆえに、国民にポジティブな期待を抱かせたことは、言説レベルでも、たとえば次の林廣吉「新政治体制への進路」（『改造 時局版10』昭15・9）に明らかである。

今や新政治体制は文字通り挙国的歓呼の声を浴びつ、出発し

やうとしてゐる。政治・経済・文化を通じ日本のあらゆる部面は息詰る矛盾の鬱積に苦しみ、その打開の道を希求してゐる時、總ての人は思ひ思ひに新し日の暁に心寄せてゐるのが現在の実情なのであり、新政治体制はそれ等の心に何とは知れぬイメージネーションを投げ与へてゐるのでありそれ故その日の光景は恐らく平和で朗らかであり得るだらう。

ここでいう《イメージネーション》を、当時の文学場における用語に変換すれば、それは「ロマンチズム」ということになるはずだ。

*

以下、ここまでの言説（動向）をふまえつつ、文学者による新体制言説を検討していく。文学者にとつても、新体制（運動）は強迫観念よろしく文学活動やその内面に影響を及ぼしていく。その前提に、次の太郎冠者「文壇無門関」（『公論』昭15・9）が示すような戦時下における文学者への期待があるのは間違いない。

日支事変が起つて以来、文芸のひろく云へば公益性、せまく云へば宣伝性と云ふものが、急激に認められて来て、軍部などではいろいろな形で積極的に文芸家に働きかけ、また文芸家の方でも日頃の文士気質を擲つて、それに積極的に答へ、それらを通じて、軍部の文芸家にたいする理解は、急激に高まつて来てゐると云つていい。

具体例をみていくならば、「転形期の文学者」という連載記事において、菊池寛が「捨身の飛躍」（『都新聞』昭15・9・26）で《少くとも文学者がとる可き新しい方向として、従来の現実偏重主義を

捨て、ロマンチック精神へ転換することは是非必要なことだと思ふ》と述べたのに対し、徳田秋声は「現実に即して」（『都新聞』昭15・9・29）で《新体制といふものもとく現実的なものである筈であり、文学者が徒らにロマンチックになれといふことは今日特に避けるべきことである》と、相反する言表を対置している。にもかかわらず、新体制という枠組みのなかでの《現実／ロマンチック》という選択の台座は共有されており、新体制の捉え方がそれほど異なっているとわけるわけでは、実はない。そうした状況下で立場の表明を留保するならば、青野季吉が「新体制と芸術」（『日本評論』昭15・9）でいうように、《国民一般におけると同様に、新体制と云ふものも実際はまだ明瞭でない》以上、《事態の展開を凝視してゐる》とする他ない。また、《新体制をするのは支那事変遂行の爲めといふ、だから支那事変遂行といふことは世界的新体制に應じ日本を何とか良くしようといふこと》であるならば、同人座談会「文学と新体制」（『文学界』昭15・11）において井伏鱒二がいう通り、それは《当然のこと》になるだらう。

ただし、そうではあつても、「新体制」という一句は、次に引く無署名「新潮評論 新政治体制とロマンチズム」（『新潮』昭15・9）が示すように、文学者個人の内面にまで深くくいこんでいく。

もしも文学が、胎動期にある新政治体制といふものと、一体不可分の生命を感じ、おなじ胎動をわかちあふべきことを自覚するならば、その文学を躍進すべき唯一の思想は、新政治体制を生みだすべき必然に迫られた母胎の意志であるところの、日滿支を一圈とする東亜新秩序建設をとほしてなされるべき世界平和の理想達成を主義とする思想のほかにはないといふ明白な結論

に達するよりほかはないのだ。

こうして、文学者にも改めて東亜新秩序という国内／外の政治動向が（再）認識されていくのだが、同論ではそうした地点から『日本の国そのものが、ロマンチックの精神にいま燃えあがつてゐる。新政治体制といふのは、畢竟ロマンチズムの運動にほかならない』として、「ロマンチズム」という鍵語によって政治と文学が媒介されていく。新体制言説を分析した若松伸哉が指摘するように、『新政治体制と文学をロマンチズム（理想）によってつなぎ、煽り立てていく傾向』が、この時期には顕著に看取されるのだ。

たとえば、山室静「新しい理想主義文学について」（『三田文学』昭15・10）による『文学に新しい理想主義精神或は浪漫主義が求められてきたのは、何も今日急に始まつたのではないが、新政治体制といふものの進行に応じて、またその声が新たに、大きく起つてゐる気がする』という言表はその典型であるし、その歩をさらに進めれば、アンケート「文学者として近衛内閣に要望す」（『新潮』昭15・9）での亀井勝一郎による『今後の政治家は芸術的直観力をそなへた雄大な浪漫家でなければならぬ。今事変が日本民族の眞の昂揚であるためには、思ひきつた高度の芸術政策を樹立しなければならぬ』という発言になるだろう。こうして亀井は、「ロマンチズム」とナショナリズムを渾然一体化させた言表によって、新体制下の進路を指し示していく。『時局の文学として最も肝要なことは、文学が新しい理想を持つこと』だという「時局と文学者の役割」（『新潮』昭15・9）の中村武羅夫も、『国家の当面してゐる事態を認識し、国民の向ふべき帰趨を把握し、文学に新しい理想の旗を掲げること』という言表を通じて、「ロマンチズム」に即した文学

によって国内／外の政治的イシューに寄与していく途を目指す。ただし、同時に中村は、「新政治体制と文学」（『文学者』昭15・9）で次のように述べてもいた。

今後、政治も文学も新体制に依つて、どんな工合に縋ひ交つてゆくか。或る点では強靱に結び附くと同時に、或る点に於いては多少の摩擦する部分があることも、それは政治と文学の宿命において、やつぱり免れ得られないところだらう。

しかし、文学は聰明に、デリケートに、そして極めて物柔らかに、恰も方円の器に従ふ「水」のごとき無限の適応性を以て、政治の凄まじい鼻息を避け、はげしい摩擦面を風に柳と受け流して、結局自己の新体制の道を確立してゆくに違ひない。

ここでは、「ロマンチズム」とナショナリズムを重ねる言表とは一線を画し、政治とは別の場所に『文学』領域が確保されようとしている。「新しい理想主義文学について」（前掲）の山室静による『文学に高い理想主義精神があふれ、政治や時代の方向との喜ばしい交歓のうちにそれが社会の中に直ちに波紋をひろげて拡がつて行くとしたら、文学者にとつても、これにこす喜びはない』という言表は、（文学／政治の関係が曖昧ではあるものの）一つの争点を示したものと見える。たとえば、無署名「五行言」（『文芸』昭15・10）における『文学者は便乗するのではない。全体としての新体制運動に調和しつつその文学部門を、独立して担当する』、あるいは無署名「新潮評論 文学の新体制」（『新潮』昭15・11）における『国を挙げて新体制一色となつた。この際この時、文学もまた文化の一部門としてのみ存在を許される』といった言表では、明らかに

政治が上位にあり、それに従属する場所に文学が定位されていく。こうした政治／文学の主従関係に抗して、文学領域の自律を説いたのは窪川鶴次郎である。「文芸時評 文学の宿命」(『日本評論』昭15・10)で窪川は、『新体制といふ言葉は忽ちのうちに国民の日常語』と化し、『それが政治にとつてまた国民生活にとつて、何を意味するか厳密には明らかでない』ものの、『私たちが今日すでに、従来とは非常に異つた生活をしてゐることは確か』だと現状認識を示した上で、次のように文学を位置づけていく。

新体制下の文学は、新体制への要望そのものが、現実の苦難に満ちた実践と、それに対する熾烈な批判から生れた如く、今日の文学の在りようとその動向が真摯に追求され、批判されることによつてのみ真実の発展をなすことが出来る。そのためには政治や思想の見地からの要望としての批判ではなく、どこまでも文学の芸術的特殊性に則した批判が必要である。

こうして、新体制言説において政治／文学の関係が争点とされていくものの、現実において、新体制(運動)は大政翼賛会へと至り、文学者も国家組織に組みこまれていった。大政翼賛会の初代文化部長を務めた岸田國士は、『力としての文化——若き人々へ——』(河出書房、昭18)で新体制を次のように意味づけていた。

文化新体制とはどういふことをいふのかといへば、これはあらゆる職域の者が、自分の利益のみを追はず、国家目的に最も適つた仕事ぶりをするやうに心構へを改め、かつ、さういふ風に仕事ができる完全な組織を作り、一歩進んで、国民全体の「文

化」を向上させるために、それぞれの立場で全力を尽すやうな姿勢を整へることであります。

ここでも曖昧さは残るが、『文化』(文学)よりも『国家目的』が上位におかれていることは明らかだろう。岸田のポジションを考慮すれば当然のことではあるかもしれないが、反帝国主義的な政治動向を期待させもした新体制(運動)は、畢竟、『世界的な出来事』——支那を助け、東亜が西洋に抗する——に即応するためのムーブメント／言説(動向)だったのであり、ここでは文学者も含め、『凡ての国民が新体制下の「兵卒」(無署名)社説 新体制への態度』、『日本評論』昭15・10)たるべきだったのだ。

ここで本節での議論をまとめておくならば、新体制言説は、表層では時機を得たかけ声と内実の曖昧さによつて、国民に明るい希望を抱かせつつ、国政への自発的なコミットメントを誘引する装置として作用していった。もちろん、同時に深層においては、東亜新秩序を一步押し進め、対中政策をはじめ、帝国主義的な外交(姿勢)への肯定へと国民の自覚を再編成していった。そうした大勢のなか、文学者は改めて政治／文学の関係を問い直されることになり、同時代の現実／言説の渦中で、ナシヨナリズムにも見紛うような「ロマンチズム」を媒介とすることによつて、新体制下においてもなお有益な文学を模索していくことを余儀なくされていった。

III

前節の検討をふまえ、本節では「清貧譚」の読み直しを試みていきたい。従来の典拠研究や主題読解を批判的に整理した上で、『清

「貧」をめぐる議論にその中心がある」と断じる藤原耕作が、『清貧』の思想を体現する才之助の屈辱が描かれた作品だ」と論じるように、これまで「清貧譚」研究は、「清貧」の一語を軸に展開されてきた。それはタイトルによる《コード化機能》の帰結として妥当かつ必然的なものではあるが、そこに争点を絞りすぎた結果、多くの要素がとりこぼされてきた面も否めない。「新体制」やそれに関連した「ロマンチズム」という冒頭部の《コード化機能》に加え、物語の舞台が日本の江戸時代に設定されたことに注目すると、テキストに内在的なもう一つの重要な争点が見えてくる。江戸時代に《庶民という多数の享受者を得た菊は、菊花壇や菊細工（菊人形）として鑑賞の対象となるとともに、一攫千金の夢をかけた人々の投機や利殖の対象となった》と指摘する高橋宏伸は、『作中作家「私」は、江戸を舞台として設定し直すことで、菊を「趣味」の対象とするか「米塩の資」を得る手段とするかという才之助と三郎の意見の対立を、日本の文脈において際立たせている』と論じており、示唆にとむ。すると、才之助／三郎（黄英）の対立の根因は、菊に関し、その育て方ではなく、それを商品とみるか否か——「作る」だけの才之助と、作った後に「売る」三郎との差異にあることがみえてくる。もつとも、語り手「私」は、才之助を紹介する際、「菊の花が好きであつた」ことに加え、菊への興味・執着が苗を買い求めることにあるとして、「佳い菊の苗が、どこかに在ると聞けば、どのやうな無理算段をしても、必ず之を買ひ求めた」と付言していただいた。それもそのはずで、才之助は「やつぱり苗が良くなくちやいけな」と思つて「おり、ひとたびは 作る」前には買うという経済行為に関わるのだが、そのことは密やかに語られ、その後、手に入れた苗自身の菊畑で育て、菊を「作ること」が、それ自体を目的として

いるかのようにクローズアップして語られる。語り手「私」から、「菊作りの志士」と呼ばれる所以である。

一方、三郎は「菊は苗の良し悪しよりも、手当の仕方」と、当初から三郎と対立する作中人物として設定されている。その意味では、三郎も菊を「作る」のだが、その上で世話になった才之助への「御恩報じ」のため、次のようにして菊を「売ること」を提案する。

「略」いまも姉と話合つた事でしたが、お見受けしたところ、失礼ながら、あまり楽なお暮しでもないやうですし、私に半分でも畑をお貸し下されば、いい菊を作つて差し上げませうから、それを浅草あたりへ持ち出してお売りになつたら、よろしいではありませんか。ひとつ、大いに佳い菊を作つて差し上げたいと思ひます。」

好意による三郎の提案だったが、才之助は三郎の菊作りの技量を目にして「少からず、菊作りとしての自尊心を傷つけられ」、「不機嫌」だったこともあり、次のように断る。

「私は、君を、風流な高士だとばかり思つてゐたが、いや、これは案外だ。おのれの愛する花を売つて米塩の資にする等とは、もつての他です。菊を凌辱するとは、この事です。おのれの高い趣味を、金銭に換へるなぞとは、ああ、けがらしい、お断り申す。」と、まるで、さむらひのやうな口調で言つた。

才之助は菊への愛を語り、「作ること」それ自体を「高い趣味」と位置づけながら、「売ること」を厳しく非難していく——ここで

注目したいのは、才之助にとって菊を「売ること」が、正しく「金銭に換へる」こととして認識されていることである。もちろん三郎にしても、目的は「売ること」それ自体ではなく、才之助の暮らしをよくするため、具体的には菊を「金銭に換へ」、それを「米塩の資」へと交換することを念頭において、「売ること」を提案してはいる。そうであれば、両者の対立点は、やはり菊を市場経済にまきこんで交換に曝すことに対する是非にあるとみてよい。そのことは、先の引用につづく次の会話にもみてとれる。

(三郎)「天から貰った自分の実力で米塩の資を得る事は、必ずしも富をむさぼる悪業では無いと思ひます。俗といつて軽蔑するのは、間違ひです。お坊ちゃんの言ふ事です。いい気なものです。人は、むやみに金を欲しがつてもいけないが、けれども、やたらに貧乏を誇るのも、いやみな事です。」

(才之助)「私は、いつ貧乏を誇りました。私には、祖先からの多少の遺産もあります。自分ひとりの生活には、それで充分なのです。これ以上の富は望みません。〔略〕」

「富をむさぼる悪業」と差異化しながら、自身の経済行為(菊を「売ること」)の妥当性を主張する三郎のいいぶんは、現実的かつ良識的なものにみえる。一方の才之助の立場は、菊も含め、お金を得るための経済行為には手を染めず、すでにある「多少の遺産」から、「佳い菊の苗」と生活必需品のみをかうことで生きていくという、極端なものである。もっとも、「私は、私の菊と喜怒哀楽を共にして生きて行くだけ」という才之助の立場からすれば、三郎の振る舞いが菊への「凌辱」にみえるのもまた、確かだろう。問題なのは、

(菊を)「売ること」をアーリーナとした、両者の交換に対する立場(の差異)にこそある。

才之助にしても、「佳い菊の苗」や生活必需品を手に入れるためには、金銭を介した交換—経済行為を行ってきたはずなのだが、三郎との間には程度問題をこえて、本質的な径庭があるようである。事実、右のやりとりをへて「不和のまま、わかれた」後、両家の境界には「高い生垣」が設けられ、「絶交」状態に入る。才之助にしてみれば、「菊を作つて売らう等といふ下心」——「売る」ために「作る」という姿勢が許せなかったのだろう。菊を離れた才之助／三郎の関係にしても、才之助は交通を断つて、自宅を他者から閉ざしていく一方で、三郎は作った菊を売るため街へ出て行き、他者との交通へと開かれていく。

この地点で、「清貧譚」冒頭の一句「新体制」を、同時代の新体制言説とともにテクスト読解に節合してみよう。支那事変下／新体制下において、「新体制」を標榜した太宰治「清貧譚」とは、確かに《空想的な物語り》であり、その意味で「ロマンチズム」をも体現した小説実践だとはいえよう。ただし、「清貧譚」が「作ること／売ること」という葛藤Ⅱ主題を内包し、また新体制言説に対中政策／帝国主義的な外交(姿勢)への肯定が含意されていたことを想起すれば、同作をアイロニカルなテクストと呼んでもよいはずだ。ここで、三木清の議論を参照しておきたい。《日支提携といひ日支親善といふのは、これまで世界史的な意味においては実現されてゐなかつた東洋の統一がこの事変を契機として実現されてゆくといふ意味でなければならぬ》と論じる「現代日本に於ける世界史の意義」(『改造』昭13・6)において三木は、この政治的イシューのポインタを《資本主義の諸矛盾》にみている。

もし東洋の統一が真に世界的な課題であるとするならば、それは今日極めて重要な課題を含んでゐる。即ちそれは資本主義の問題の解決である。資本主義の諸矛盾を如何にして克服するかといふことは、今日の段階における世界史の最大の課題である。この課題の解決に対する構想なしには東洋の統一といふことも真に世界的な意味を実現することができない。

臨界に達した国内市場から、外交手段を講じて、国外へと市場を求めていく交換を核とした帝国主義的な欲望が、右にいう《資本主義の諸矛盾》ならば、それは《支那事変》に対して世界史の意味を賦与すること《を》通じて解決すべき新体制（運動）の課題でもあつたはずだ。しかし、《世界史の統一の名のもとに働くヨーロッパ的思想》

が《帝国主義と結びついてゐた》ことを批判する三木が先に述べた《克服》の内実もまた、現実的には対支市場／戦線の拡大——資本主義の追求として進められていく。逆に、そうした資本主義の横暴に対しては、すでに富があればそれを分配することで、交換を可能な限り排していく途が考えられ、この二つの立場は、「清貧譚」における三郎と才之助に擬えられる。住環境や生活水準を改善するため、菊を売ることゝを厭わず、市場に曝してはお金と交換しては利潤を得ていく三郎と、「佳い菊の苗」を買うことはあつても菊は「作る」ばかりで決して「売る」ことはせず、家が「貧しく荒れはて」ようとも「遺産」で細々と最低限の生活を維持していく才之助とは、資本主義に対する極端な立場をそれぞれ体現しているのだ。

もつとも、ここで三郎／才之助、さらには「菊」などに、具体的な国名や陣営、人名を代入したいわけでも、「清貧譚」を国際状況の絵解きとして読みたいわけでもない。そうではなく、ここでは当

時の日本が国内／外の政治的イシューとして突き当たっていた困難をモチーフとした寓話が、その渦中にあつた「清貧譚」に書きこまれていた事実を確認し、テクストが現在形の歴史と切り結んだ生々しい痕跡／批評性を指摘しておきたいのだ。こうした様態が、「私」の新体制も、ロマンチズムの発掘以外には無いやうだ」という一文の小説実践ならば、ナシヨナリズムと一体化することなく、逆に同時代の歴史の力学を照らし出すこの「太宰治」清貧譚とは、すぐれたリアリズムですらある。「清貧譚」は、作ること／売ることとして才之助／三郎という登場人物（の設定）が担った対立を通して、支那事変下／新体制下の日本で、資本主義（批判）の是非を問う一面を、内包していたことになるのだから。

*

このように「清貧譚」を読み直した上で、さらに検討すべきなのは、テクスト後半の展開である。お互いの立場はかわらないものの、菊（への敬意）を媒介に「一たんは和解成つて、間の生垣も取り払はれ、両家の往来がはじまつた」後で、三郎は才之助に姉の黄英との結婚を申しこむ。「はじめ、ちらと見た時から、あの柔かな清らかさを忘れかねてゐた」とあるように、当初から才之助は好意を抱いていたようであるが、性格ばかりでなく、売ること——（菊と金銭の）交換を是認できない以上、返事は次のようなものになる。

（才之助）「私には結納のお金も無いし、妻を迎へる資格がありません。君たちは、このごろ、お金持ちになつたやうだからねえ。」と、かへつて厭味を言つた。

菊を売ることゝで「お金持ち」になつた黄英・三郎姉弟を揶揄

し、「入り婿は、まつびら」だと嘯く才之助ではあったが、「清貧が、いやでなかつたら、いらつしやい」という言伝に、黄英は「清貧は、いやぢやないわ。」と喋って才之助のもとへ嫁入りする。この展開にも増して重要なのは、同棲後、黄英が「茅屋の壁に穴をあけ、それに密着してゐる陶本の家の壁にも同様に穴を穿ち、自由に両家が交通できるやうに」したことである。

交換を回避し、「清貧」という自身の生き方に応ずることを条件に迎えた黄英は、しかし「壁」という境界に「穴を穿」ってしまう。ここで交通とは、単に人が行き交うことのみならず、陶本家から菊を、売ること、で得たお金、およびそれを交換して得た家具などが馬山家に入りこんでくることを含意する。つまり、「清貧」という看板を掲げて拒んできた（菊を）売ること（資本主義）が、なしくずし的に才之助の生活に浸透していくのだ。そうであれば、才之助が次のように「しみじみ愚痴をこぼした」のは当然でもある。

「お前のおかげで、私もたうとう髪結びの亭主みたいになつてしまつた。女房のおかげで、家が豊かになるといふ事は男子として最大の不名誉なのだ。私の三十年の清貧も、お前たちの為に滅茶滅茶にされてしまつた。」

その上で興味深いのは、本稿の読解戦略の適切さをも保証する、次の黄英の台詞である。

「略」私は、ただ、あなたの御情にお報いしたくて、いろいろ心をくだいて今まで取計つて来たのですが、あなたが、それほど深く清貧に志して居られるとは存じ寄りませんでした。では、

この家の道具も、私の新築の家も、みんなすぐ売り払ふやうにしませう。そのお金を、あなたが好きなやうに使つてしまつて下さい。」

この時、才之助が「私ともあらうものが、そんな不浄なお金を受け取ると思ふか。」と応ずるのは必至である。（菊を）売ること、に代表される資本主義的な交換を忌み嫌う才之助に、愚かにも黄英は、売ること（モノをお金に交換すること）、さらにはその代価を別の用途に使うこと（お金をモノに交換すること）を提案してしまつていたのだから。

これほどまでに、「あなたと私たち」（才之助と陶本姉弟）とは「まるで考へかたが、あべこべ」で、その根因が資本主義的な交換に関する立場の差異にある「清貧譚」というテクストの相貌を確認した上で、さらに重要な結末へと至るストーリーを追つていこう。

「清い者は清く、濁れる者は濁つたままで暮して行くより他は無」と「心にもないつらい宣言」によつて黄英と別れる決断をする才之助だが、売ること、を潔しとしない立場を變じない以上、それは心情以前の問題であつたはずだ。庭の隅に作つた「二坪ほどの掛小屋」に「引きこもり」と語られている以上、やはり表面で「清貧」を掲げる才之助がその深層（真相）で守ろうとしているのは、交換（交通）を忌避するという立場に他ならない。

饒舌な語りをもつ「清貧譚」では例外的なことだが、この三日三晩を語り手「私」は省筆し、「寒さ」ということその他に、才之助が変節へと至る葛藤を書くことはしない。屈した後にも、「才之助は、深く恥ぢた。」とあるばかりで、その深さの内実が具体的に明かされることもない。いわば、三日三晩の才之助をめぐる諸条件と内面

とは、テキスト内の空白となつてゐるのだ。しかも、売ることに關して鋭い対立を構成してゐた三郎が消えてしまふこともあり、事後的にも才之助の転機の内実を知る手がかりはほとんどない。

状況証拠からいへば、才之助は「ちつとも剛情を言はなくなつた」と語られてゐるし、建築としての家の問題までも含めて、以前より円滑に三人の生活が営まれてゐるのは確かである。

墨堤の桜が咲きはじめる頃になつて、陶本の家の建築は全く成り、さうして才之助の家と、びつたり密着して、もう両家の區別がわからないやうになつた。才之助は、いまはそんな事には、少しも口出しせず、すべて黄英と三郎に任せ、自分は近所の者と将棋ばかりさしてゐた。

こうしてみると、やはり「清貧譚」には《才之助の屈服》が書かれていて、（菊を）売ることを是とする陶本姉弟は、両家の境界もなくすほどに才之助をとりこんだという理解が妥当にみえはする。しかし、結末まで精読するならば、才之助は当初からの「清貧」という生き方をかえたといえるか、疑問が残る。家屋や財産（当初は「父の遺産」）をはじめとした資産規模が大きくなつただけで、才之助の生き方は変じてないのではないだろうか。

花見の宴席で酒を飲みはじめた三郎は、消える前に次のように話してゐたはずだ。

「姉さん、もう私は酒を飲んでもいいのだよ。家にお金も、た
くさんたまつたし、私があなくなつても、もう姉さんたちは一
生あそんで暮せるでせう。菊を作るのにも、厭きちやつた。」

と妙な事を言つて、やたらに酒を飲むのである。

三郎はここで菊を作ることに飽きたといつてゐる。飽きたのなら、さらには生活上の必要もないのなら、三郎は菊を作らなくなるだろう。作らなければ、当然売ることはできない。それが推測の域を出ないとしても、三郎は消えてしまふ以上、以後菊を作ることも売ることもできなくなるのは疑いようがない。こうした三郎の言動は「もう姉さんたちは一生あそんで暮せるでせう」という判断、さらにはそれを支える財産に拠る。

そうであれば、ここに至るまでのプロセスに葛藤はあつたものの、蓄えに適した生活を営み、それ以上は菊を売ることなどの経済行為には手を染めない、という才之助の生き方は、構造的にはいささかも変じてない。かわつたことといえば、黄英という妻を迎えたこと、家屋が立派になつたこと、財産が増えた（であろう）こと——いずれも、三郎の働きと媒介による——くらいである。表面的には「清貧」という看板をおろす格好になつた才之助だが、（一定の財産をもつた上で）売ること——モノをお金に交換すること——を忌避した生き方を「清貧」と名づけてゐたのなら、結末部に至つてもなお、それは守られてゐるといつてよい。

最後に、こうしたストーリー把握から、新体制言説のなかの「清貧譚」読解をまとめて、本稿の結論にかきたい。このストーリーを通して、もつとも得たものが大きい人物は才之助である。一見棄てたかのような「清貧」という生き方すら保持した上に、妻と財産を手に入れ、菊作りにも経済行為に關しても敵対者だつた三郎は消えてしまふ。従つて、穿つた見方をするならば、才之助とは、表面的には批判されようが、自らの信条（「清貧」）を汚すことなく、

対立する立場の姉弟を利用して、生き抜いた策士のようにさえみえる。同様の見方を敷衍すれば、「売ること」を肯定しながらも、「菊を『売る』こと」も「作ること」もしなかつた黄英もまた、ストーリー展開を通じて、三郎（の能力）を利用して、才之助という伴侶と将来の生活を保障するほどの財産を得たことになる。一方、これまで、その卓越した菊作りの能力によって、才之助の「清貧」を打破した立役者のように理解されてきた三郎は、その実、消え去る媒介者メデイエイターよろしく、姉の黄英と、「売ること」を執拗に批判された才之助のために奉仕させられた挙げ句、自ら消えていく人物だということになる。

昭和一五年当時、新体制運動に伴い、「新体制」という一句が、時には相反する複数の意味を曖昧に内包しつつ、抽象的な明るさと同時に帝国主義的な欲望を漲らせていたように、「ロマンチズム」を標榜した「清貧譚」というテキストもまた、単一の主題に貧しく収斂することなく、登場人物の言動やストーリー展開に「表／裏」が構造化されることで、同時代の歴史と切り結びながら言葉の複数を新体制言説同様に生きていた。その意味で、太宰治「清貧譚」とは、小説であると同時に新体制をめぐる言表の一つでもあり、かつ、同時代の歴史の渦中にあつて、新体制言説の急所を多角的に照らしだし、「聊齋志異」をモチーフにしたがら、同様の構造を小説へと転位した曲芸的なテキスト＝歴史の結節点でもあつたのだ。そうであれば、「清貧譚」は《空想的な物語り》として新体制下の《自分の気持の息苦しさを救つてくれ》たり、あるいは《抵抗》であり得たばかりでなく、シリアスな国内／外の政治的イシューを寓話的に描出した小説でもある。「私の新体制も、ロマンチズムの発掘以外には無いやうだ」という語り手「私」の一文には、少なく

ともこの程度の含意があつたとみるべきだろう。

注

- (1) 《太宰は原作の筋立を用いながら、人物の性格や行動に創造の翼を思うがままにひろげて》いると指摘した上で、《才之助の高潔さと、菊を売らねば生きる道がないと叫ぶ三郎の主張とは二つとも、太宰の戦時下の相矛盾したあがきと焦燥を、代弁している》と論じる村松定孝「太宰治と中国文学——「清貧譚」と「竹青」について——」（『比較文学年誌』昭44・3）、《清貧に甘んじる、という気持は「清貧譚」の主人公ばかりでなく、太宰自身のものであつた》と論じる鈴木二三雄「太宰治と中国文学(二)——「清貧譚」と「竹青」——」（『立正大学国語国文』昭45・3）など、初期の典拠研究にはテキストと太宰治とを重ねて意味づける発想が顕著である。他に、大野正博「聊齋志異「黄英」の研究——太宰治「清貧譚」との比較による作意の考察——」（『集刊東洋学』昭46・5）、鴫田亨「太宰治「清貧譚」論——（言文）平6・4、榎本重男「太宰治の『清貧譚』考——『聊齋志異』の『黄英』と比較して——」（『人文社会科学研究』平12・3）など。この傾向は、王浄華「清貧譚」と「竹青」について」（『国語の研究』二〇〇六・一一）や陳愛陽「異文化の境目にある「自我意識」——聊齋志異・黄英」から太宰の「清貧譚」へ」（『日本語日本文学』二〇一〇・三）にまでつづいている。
- (2) この点に目配りをした先駆的な研究として、米田幸代「太宰治「清貧譚」論」（『同志社国文学』平14・3）があり、本稿も大きな示唆を受けた。ちなみに、木下半治「新体制辞典」（朝日新聞社、昭16）では、「新体制」は次のように解説されている——『国内新体制または新政治体制ともいはれた。原則的には日本的なる全体主義政

- 治体制の筈であり、その現段階における具体的形態が大政翼賛運動及び大政翼賛会である。《即ち近衛首相は内相に安井英二、法相に風見章を据えて新体制確立運動に対する布石となし、新内閣の政策検討と並行して新体制運動を進め、八月二十三日新体制準備委員会委員を決定（二十七日正式発表）、二十八日第一回準備会を開催、九月十七日の第六回準備会を以て大政翼賛運動及び大政翼賛会創立の運びにいたり、こゝにはゆる新体制運動は一応の形態を整へ得たのである。（第七十六議会始まるや大政翼賛会の「性格」に関して論議が巻き起つた。》
- (3) R・バルト／沢崎浩平訳『テキストの出口』（みすず書房、昭和62）
- (4) 《徒らに清貧と純粹のみを肩怒らして守るより、現実社会に生き、その才能を米塩に代えることこそ、真の芸術家であり人間である》という《主張》を「清貧譚」に読みとる、奥野健男「太宰治論 増補決定版」（春秋社、昭43）他参照。
- (5) 塚越和夫「太宰作品で何を教えるか——「清貧譚」の場合——」（『高校通信東書国語』昭61・12）など、国語教材論に顕著な指摘がある。なお、久保田裕子「高等学校国語教科書の教材に関する一考察——教材としての太宰治「清貧譚」」（『敍説』平15・8）も参照。
- (6) 安岡章太郎「私の新体制」（『新潮』昭46・11）。なお、安岡は同文に先立ち、エッセイ「聊齋私異」（『文学界』昭45・1）で蒲松齡の落第をクローズアップし、その後には、「私説聊齋志異」（『朝日ジャーナル』昭48・9）昭49・2↓朝日新聞社、昭50）という小説を物してもいる。
- (7) 栗原彬『歴史とアイデンティティ』（新曜社、昭57）
- (8) Yu・M・ロトマン／磯谷孝訳『文学理論と構造主義——テキストへの記号論的アプローチ——』（勁草書房、昭53）
- (9) 拙論「語りかけるテキスト——太宰治「カチカチ山」」（『国文学』平20・3）参照
- (10) 吉岡貞緒「太宰治「清貧譚」論——物語の胎動——」（『曙光』平16・12）に、《「清貧譚」との題名は、国民の生活を引き締める新体制運動を反映している》との指摘がある。
- (11) 高見順『昭和文学盛衰史』（引用は『高見順全集 第十五巻』勁草書房、昭47）
- (12) 安田武「定本 戦争文学論」（第三文明社、昭52）参照
- (13) M・フレッチャー／竹内洋・井上義和訳『知識人とファシズム 近衛新体制と昭和研究会』（柏書房、平23）参照
- (14) 米谷匡史「日中戦争期の天皇制——「東亜新秩序」論・新体制運動と天皇制——」（『岩波講座 近代日本の文化史7 総力戦下の知と制度』岩波書店、平14）
- (15) 若松伸哉「戦時下における〈個〉の領域——太宰治「散華」論」（斎藤理生・松本和也編『新世紀 太宰治』双文社出版、平21）
- (16) 藤原耕作「太宰治文学と中国——「清貧譚」と「黄英」」（『敍説』平18・1）
- (17) 高橋宏宣「太宰治「清貧譚」における〈江戸〉」（『解釈』平17・7）
- (18) 《昭和十五年前後における太宰の〈ロマンチズム〉》を作品横断的に検討した高橋秀太郎は、「昭和十五年前後の太宰治——その〈ロマンチズム〉の構造——」（『国語と国文学』平18・6）において、《太宰の〈ロマンチズム〉の論理とは、同時代の現実（政治）を否定し、それとは異なった地点に新たな理想を求めることなど不可能になりつつあった時代に、いかにロマンチズムを語るかという課題に対する太宰なりの応答だったようにも思われる》と論じており、本稿の問題関心にとっても示唆的である。
- (19) こうした本稿の読解戦略は、「文学者として近衛内閣に要望す（ハガキ回答）」（『新潮』昭15・9）に対する《唯物史観の徹底検討。》

という太宰治の返答とも共鳴していよう。

- (20) 原典との比較検討をへて、ロマンチズム／リアリズムという観点から「清貧譚」を読み直した、木村小夜「太宰治「清貧譚」論——ロマンチズムから追放されない男——」〔『香椎潟』平成24・3〕では、太宰治の作品史的展望までが示されている。

※「清貧譚」本文は、『太宰治全集第四卷』（筑摩書房、平1）によった。なお、本稿は、三鷹ネットワーク大学講座「太宰を読む百夜百冊」における講演「さまざまなアップローチ、さまざまな〈新体制〉——太宰治「清貧譚」を読む——」（三鷹ネットワーク大学、平20・5・7）をベースにした部分がある。

（二〇二二年十月三十日受理、十二月四日掲載承認）